



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第3主日 C年 (2022年1月23日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ネヘミヤ記 8章 2—4a、5—6、8—10節
第二朗読：コリントの信徒への手紙一 12章 12—30節
福音朗読：ルカによる福音書 1章 1—4節、4章 14—21節

あぶらそそ もの 油注がれた者 クリストゥス

三つの朗読から

「律法」はヘブライ語でトーラーですが、それは動詞ヤーラー（矢を射る）から派生した言葉だそうです。ですので、トーラーは掟というよりも「歩むべき道を指し示すために神が放った指示」と理解してよいでしょう。神さまが無償の恵みとして教えた「指示」ですから、律法という訳語はあまり相応しくないかもしれません。また、それは生き生きとしなない文字の塊ではなく、神からの生きた呼びかけであり、力の源でした。トーラーによって人はいのちを取り戻し、喜びを覚えるのです。『詩編』にはつぎのようにあります（19編 8—9節）。

主の律法は完全で、魂を生き返らせ

主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。

主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え

主の戒めは清らかで、目に光を与える。

律法に対する態度は服従よりも「喜び」です。なぜなら律法は「神からの愛」だからです。

第二朗読では冒頭の12節に注目しましょう。

この節を直訳すると

体は一つであって

多くの部分を持つ、

体の部分は多くあるが

体は一つである。

となるそうです。「一つ」が強調^{きょうちやう}されます。人間のからだが多くの部分であるように、キリストのからだである教会も一つだという意味になります。

福音朗読では後半の部分^とをここに留^とめたいものです。『ルカによる福音書』4章全体^{きょうつう}に共通するキーワードは「霊」となります。イエスは霊^{れい}に導^{みちび}かれて荒れ野^あにおもむき、誘惑^{ゆうわく}を受けます(1-13節)。そして霊の力^{ちから}に満ちてガリラヤに帰^{かえ}ります(14節)。霊はギリシア語で Pneuma ですが、それには息吹^{いぶき}の意味があります。



「預言者イザヤ」 ベンジャミン・ウエスト 1782年

説教

「今日^{きょう}」という表現^{ひょうげん}は『ルカによる福音書』に時々登場^{とうじやう}します。イエスはザアカイ^{おとず}に対して「今日^{きょう}、救^{すく}いがこの家^{おとず}に訪^まれた」(19章9節)と宣言^{せんげん}し、一緒^{いっしょ}に十字架^{とうぞく}にかけられた盗賊^{とうぞく}には「はっきり言^{かた}っておくが、あなたは今日^{きょう}わたしと一緒に楽園^{かた}にいる」と語^{かた}ります(23章43節)。そして何^{なん}よりも救^{すく}いから遠^{とほ}いと自他^{じたとも}共に思^しい込んでいた羊飼^{つた}いたちに天使^{てんし}が伝^{つた}えます。「今日^{きょう}ダビデの町^{すく}で、あなた^{ぬし}がたのため^{すく}に救^{すく}い主^{ぬし}がお生まれ^{ぬし}になった」(2章11節)。

福音朗読^{いんよう}の引用^{かしよ}の箇所^{しやうめい}はイザヤ書61章1-2節です。第三^{あぶらそそ}イザヤの召命^{せいめい}の箇所^{せいべつ}です。油^{あぶら}注^{そそ}ぐとは神^{かみ}がその人^{ひと}を聖別^{せいべつ}し、使命^{しめい}を与^{たま}えることでした。旧約聖書^{きうやくせいし}では、ある時は王^{やみ}に、ある時は祭司^{さいし}に、ある時は預言者^{よげんしや}に油^{あぶら}が注^つがれています。

油^{あぶら}を注^つぐことと、主^{しゆ}の霊^{れい}とは密接^{みつせつ}に結びついています。そのことを教^{おし}えてくれるのがイエスのナザレ^{なざれ}での最初^{さいしゆ}の説教^{せききょう}です。

実際にイエスが油注がれたわけではありません。しかし、神の霊の働きの中で、イエスは自分が神から聖別され、特別な使命を与えられたことを自覚していきます。そしてこの主の霊がイエスの生涯を通じて寄り添い、助け、励まし、導いたのです。

わたしたちのキリスト者としての生活の中で、油を塗られる(油を注がれる)ことは数えるほどしかないかもしれません。洗礼の時、堅信の時、そして病者の塗油の時です。司祭であれば叙階式。しかし、いずれも油を塗ることを通して、主はその人に使命を与えていくのです。洗礼式の塗油の場面が分かりやすいでしょう。

神の民に加えられたあなたがたは、神ご自身から救いの香油を注がれて、大祭司、預言者、王であるキリストに結ばれ、その使命に生きるものとなります(成人洗礼の儀式書より)。

司祭の叙階式では塗油によってキリストと結ばれたことがさらに強調されます。

御父は聖霊の力によって、主イエス・キリストに油を注がれました。信じる人々を聖なる者とし、感謝の祭儀をささげるために選ばれたあなたを、キリストが守ってくださいますように。

塗油を受けるということは、キリストに結ばれることを意味するのです。キリストの祭司職、預言職、王職に結ばれて、キリストと同じ使命をいただき、キリストのように生きることを意味するのです。秘跡における塗油は単に儀式的な「しるし」だけではないのです。

もちろん、洗礼は生涯で一度だけ、堅信も一度だけです。ですから、塗油を頻繁にしてもらって、信徒としての使命を再確認することはできません。しかし、いただいた恵みをよみがえらせ、再生させさせることができるのが秘跡です。いつも、折々に応じて、わたしたちは洗礼と堅信の時に塗油していただいたことを思い起こすことができます。こうして、自分の中におられる「主の霊」の働きを新たにし、活性化することはできると思います。

「聖霊の塗油」を受けて、キリスト者とさせていただいたことにわたしたちは感謝すべきですし、そのおかげで、それぞれが生きている場で、社会で、自分の人生を惜しみなく誰かのために明け渡して生きていく使命があるのだということをいつも心に刻んで生きていきたいものです。



『ケルズの書』より「キリストの即位」

『ケルズの書』は8世紀、ケルズ修道院で制作された聖書の手写本。世界で最も美しい本と言われ、アイルランドの国宝。